

522

281

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



夜の心

吉井勇



大正

13.6.28

内交

版社ントラブ

522-281

目次

自畫像	一
鸚鵡杯	九
戀愛懺法	二二
相聞陳思	二九
冷淚行	四一
秋のおこづれ	四九

祇園帳

五七

船上哀歌

六五

友とわれ

七五

懺悔行

八三

一、寂寥

八五

二、靈山行

八九

三、僧房夢

九一

四、過ぎし日の夢

九五

五、死を思ふ

九七

六、佛法僧

一〇〇

七、遁世

一〇三

或る女

一〇七

消息抄

一一八

夜の心

一二三

旅ゆく心

一三三

馬樂忌

一四一

長崎紀行

一四七

修善寺遊草

一七五

寒檠莊雜詠

一八五

業火餘燼

一九七

自
畫
像

この額たゞ拳銃ピストルの銃口つちやを當つるに小さなどころなるべき

現身の寂ひびしさに胸いたむころ額の皺も深みゆくころ

うなだれて額に手をば當つれども懺悔のころなどか起らぬ

わが額を縦に刻める皺ひとつかなしき戀をいまでも語れる

いつはりの世をいきどほるべし昂^かげしかの夜の眉を見るよしもなし

いくたりの忘れぬひとをうつしけむ瞳か知らね今日も曇れる

そのかみのきよき瞳の光さへいつしか消えてはかなきも秋

幾どせのわがかなしみをたたへたる瞳の深さ君よはかりね

この瞳また澄ますべきよしもがなよしもがなとて歎きくらすも

そのむかし火のごと燃えしわが頬にもいまはつめたき寂しさの浮く

たそがれの光寂しき頬に射していよよ寂しき夕なるかも

あたたかき涙ながるるかの頬と冷たき笑のうかぶこの頬と

うばたまの黒き瞳にうつらねばわが横顔も冬寂びにけり

われを見てあなけうとしの阿闍梨顔往ねと云ふひとあらん寂しき

失ひし戀の行方を追ふごとき眼差をしてわれあり今日も

わが額ぬかに不幸と云へる烙印アキガヒを捺なして往にたるひとは誰が子ぞ

燃ゆる火と熱き情も人の世の風の寒さも知りし唇

鸚
鵡
杯

塵の世の塵に生れしかなしさに酒に遁れしわれにやはあらぬ

鸚鵡杯葡萄の酒もはや倦きぬ身を焼きつくすうま酒もがな

杯をいまはとどむるひともなしこの春寂し酒は汲めども

寂しさの極まるどころ酒甕と劍とありき何の謎ぞも

杯の縁に口觸れくちづけた思ふと云はばひと笑はむか

いづれをか樂しと云はむよしとせむ酒に酔へると戀に酔へると

酒甕のなかに溺れて死なばやとふとしも思ふ酔へど寂しき

しみじみと見れば悲しき酒のいろわれの心のいろやうつれる

友をかし酒にも倦きてこのごろは鬨さか體かうべなご蒐あむると云ふ

酔へばまた涙ながれて堪へがたし酒のなかにはかなしみや住む

酒に酔ふ否かなしみに酔ふと云ふ争ひをかし果てしなれば

杯のなかに聲ありあはれ汝なを思ふ子なしと云ふが悲しさ

末法の世を歎きわび今日もまたいきどほろしく酒に走るも

酒甕をくつがへすときふと胸に來しこゝろよき誰に語らむ

杯を七つ並べて占ふは友との戀の勝ち負けのこと

酔へ命みぢかしと云ふ歌うたひたんなたりやと往くは誰が子ぞ

うらざりし女ごころに似て苦き酒は汲まじと云へど酔ひぬる

そむきたる女はやがて斯くてそと友の抛つ杯もよし

涙もてつくりし酒に酔ふときのみだれ心地や寂しからまし

末法の世にうつくしき戀もなしせめて夜毎を酒に酔はしめ

末法の世に生きてあるかなしみを酒に忘れて今日もある身か

酒にがし破れし戀のあちはひに似ると云ひつつなほ酔へるひと

世にそむき君にそむきてはかなくも汲む酒なればとどめたまふな

悲しげに酔ひてうたふは酔はざれば生きがたき身を歎く歌かな

いにしへの萬葉集のうたびとも酒を讃^たへぬわれもたたへむ

酒の神をことほぎまつる祭り日をいつと定めむ春はみちかし

酒甕のなかよりわれの春は來るこの堪へがたき寂しさは來る

酔泣はするともよしや堪へがたきこの寂しさはいかにすべけむ

酒の神童形なれどありがたしかたじけなしと涙ながすも

寂しやとひとりかこへば杯のなかにこたえ研し寂しやと云ふ

まぼろしに須彌山しゆみせんも見るおもしろさこそ酒をたたへあかすも

大跨に銀座通りを歩むときわれも酒場の猛者かと思ふ

酔泣す酒に酔へるにあらずしてまづかなしみに酔へる男は

戀ぞめのうらはかなさも酔ぞめのうらはかなさにいまだ及ばず

戀
愛
懺
法

そのかみの戀の猛者とも思はれず懺悔の涙しとど流せば

みづからを殺しあはぬ弱さをば歎く涙と知るや知らずや

戀あまた葬ひて來しいやはての菩提心とは知るひともなき

ことごとく五つの戒を破りたる身も秋來れば涙ながしぬ

地獄繪もまざまざ見わて止みがたき懺悔のこころおさへかねつも

あはれなるみだれ心地となりにけり悲しやと云ひ悔しやと云ひ

いくたびかかくは懺悔をしたりけむかくていくたび人を戀ひけむ

そのむかし君と泣きたるときのごと懺悔の涙流るるもよし

懺悔歌うらはかなげによむときはわが世の秋の來しこころする

女らの空涙とはことかはり熱くも頬をばつたひぬるかな

魂はもぬけのからのなきがらも何をか悔ひて涙ながしぬ

浪華なる與兵衛と云へる極道がしたることをもわが心とく云ふ

たたかひのはなしのごとく酒場にてすれば懺悔もおしろきかな

悪しきことせしにはあらぬいつとなく悔いてふものを覺ね初めにき

さかづきの酒みな冷ぬぬいつの間に悔ひの涙をここにたたへし

新しき年を迎へぬいささかは懺悔變りのこともあれども

君のする偽りごととわが懺悔いつれか寒きものどかはしる

相聞陳思

いちにんのまことの少女見つと云ふこのよろこびに今死ぬもよし

垂乳根の親の言葉に背けよと云ふにはあらねいとしまひとよ

いぢらしと思ひしことがいつとなく戀どかはりて秋も暮れゆく

或るときはひとり夢みぬ世を遁れ君とわが住む山莊のさま

人の世のいとむづかしき掟など破るもよしやわが君を得む

君ありて命はじめてたうどかり今年はわれも春をたたへん

人みな春のたよりに似もやらで悲しきことを書ける文かな

相思ふことも許さぬ人の世は生き甲斐もなし春は來れども

人ふたり相思ふだに許されぬこの世まことの春ありや否いな

春なれば涙かくして笑みてあれいつはり人のするがごとくに

春は來ぬもし君得ずば世を遁れ山に入らむと思ふひとにも

變らじと二人かたみに誓ふことわれらが春のならばしにせむ

なつかしくやさしき君が文を見てはづかに春のなぐさめにする

どこしへに君が心な變りそとまづ祈りにき春のはじめに

吾妹子と君を呼ぶべき日はいつと春のあしたを驗者がりゆく

熱を病むひとのごとくにかこつらく死ぬともよしや君がためには

百年を今日のひと日にちぢめたるごとき思にわが君を見む

宗演はすでおはさすわが胸の深き惱みの云ひどころなき

火のごとき思を胸にかくしゐて冷やかに笑むわれど知りきや

これやこのいつはりの世に生きむより山に遁れてあらむ二人か

後の世も神も頼まずこのふたり君をこそ頼めわれをこそ頼め

わがこころこよひも君に通へよひとりしづかに祈りてぞ寝る

武藏野の楢の木立のたそがれに誓ひしことを忘れたまふな

はなれるてともに燃えねばあはれなり君のほのほどわれのほのほど

さいはひに涙をながす術すべを知る戀しきときは涙ながさむ

うらさびし春は來れども君が文はかなきことを書きておこせば

ただひとり牡丹のごとき火を見つつ火桶のまへに君を思ひぬ

前の世のその前の世の日なるべしはじめてわれの君を見たるは

いちらしき君が心に似てにはふ沈丁花よりかなしきはなし

君がため生れしわれと思ふとき君あるもわがためと知るとき

いつはりの世に生きてあるかなしさを君もしみじみ知ると云ふかな

君が文ひらけば涙かをるなりいちらしき文あはれなる文

吐息をばかたみにつきぬこのゆふべ風も吐息のごとく吹くらむ

冷
淚
行

みすすかる信濃國のも過ぎて來ぬ懺悔の旅は遠くはるけし

旅に出で酒に酔へどもなぐさまず伽羅のにはひも涙さそへば

いつはりの世に生きがたきわが身ぞと思ひて出でし旅にやはあらぬ

夜明くれば文字も消ゆるらむ墨うすくあはれに寒き信濃消息

○ 涙さへつめたく頬を流れきと君にうらみの消息も書く

旅に出でいつはりおほき人の世をいきどほるより寂しきはなし

酒にがく女みにくしかくのろひ伽羅の巷をのがれ來しかな

世之助の旅にあらねば棄ててゆくほどの情なまじもあらで寂しき

かくかくに旅寐をすれどなぐさまずいきどほろしき心なるかな

○ 山を戀ふ否々遠き空を戀ふいなさららに遠き君戀ふ

君を戀ふこころと山を戀ふこころ相争ひてねむりかねつも

旅びとは空をながめて思へらく雲とならまし風とならまし

やはらかきかの腕には似もやらぬさむき枕を旅すればする

ただ一夜逢うて別るるかりそめの戀よりもなほあはれなる旅

われもゆくむかし芭蕉が野ざらしの旅に出でたる秋風のみち

いちはやく秋の心となりにけり世を恨みわび旅ゆくひとは

昨日まで酒場の猛者とうたはれし身にあぢきなく旅寝するかな

みすすかる信濃の國の秋よりもさらに寂しきわれの心か

秋のおとづれ

またひとつ戀に破ると聽きてより俄かに秋はおどづれて來ぬ

さめざめと肩顛はせて泣く君の姿も見せぬ秋のまぼろし

かなしみが日毎夜毎におどづる君の胸よなわれの胸よな

白蓮の歌をこよなくもてはやし筑紫の秋を戀ふと云ふひと

秋のおどづれ

秋の夜の扇が谷の山莊のかの蟲の音を忘れたまふな

別れむと君がささやく聲を聴きはじめて秋のおとづれを知る

秋の夜はいつしか更けぬわが懺悔君が涙を誘ふまにまに

人ごころ頼みがたしと知りぬなど君書き越しぬ秋のたよりに

孔雀ともむかしは呼ばれたるひとが身の衰へをなげくころかな

戀遂げず筆空しくなりしときしみじみ秋を憂しと知るらむ

杯に手も觸れずして秋あまり悲しとひとり思ひけるかな

自らを傷みて酔へごさかづきをどごむる人もあらぬ寂しさ

また見じと別れしひとにふと逢ひて朝戸出さびし鎌倉の秋

秋は來ぬ君が或る夜のもの妬み恨みごとなど前ぶれにして

あはれなる歌をつくるもわかき日のやごとなかりし華奢のはてかな

○ 秋の雨戀しきひとの墓に降るころともなりぬわれも死なまし

夢なれごさびしお三輪の姿して世に亡きひとはわが傍に來ぬ

こよひふと懺悔のこころ起りぬとわれの書きたる秋めきし文

懺悔する人のごとくにうなだれし机のうへの秋の花かな

君に似て月の光も寒かりき扇が谷の秋のわかれぢ

○ものを云ふこともあらねば今日もまたさびしく秋の風と語りぬ

このごろのわが唧ち言『あぢきなしさびし果敢なし悲しうらめし』

祇園帖

加茂川の水細うして旅ごこちいや遣瀬なくなりまさるかな

秋江が戀ふる女のみだれ髪にも似るものか京の柳は

思ひ寝かわび寝かあるは恨み寝かわかず果敢なし京の旅寝は

われはじめて京に往きしは白秋がまだ人間におはすころかな

風流は寒きものかなかくかこつ人ありて京の夜はやく更く

そのかみの見果てぬ夢のなかのひと祇園言葉のなつかしきひと

ややありて寂しさ湧きぬ今もなほかはらぬ加茂の水の音かな

たとふれば君が心のさむさにも似たりと云はむ京の夜寒を

秋江が戀慕の闇にあらねども祇園の夜の闇ははかなし

風さむし酒もつめたし京の夜は旅人めきし寂しさに寝む

一休の住みし庵が一力の大廣間よりなつかしきころ

われひとり覺めてはかなき京の夜を酒三昧に入れる友かな

はしけやし祇園祭の山鉾の阿蘭陀布に似たる汝が帯

山ばなの平八にゆく道すがら聞きしはかなき身の上にして

○ 黒谷の法然に戀なきはよしかの君に戀なきははかなし

はなやかにその日その日を送りたる日も遠ければ京は寂しき

舞姫のだらりの帯にあるときは矢車草もなつかしきかな

さかづきの酒冷え君の心冷え酔ひがたきかな京の春寒

旅びとは旅にて得たる戀ひとつ京に残してかへり來しかな

舞姫はものを思ひぬ加茂川の水のにはひや胸に染みけむ

酒中花に戀占ひしたはむれもいまはた悲し京の思ひ出

船上哀歌

防人の歌のこころをいま知りぬ筑紫にわかれ船出するとき

誰が子にわかれを惜しむ歌書かむ筑紫の旅の日記のをはりに

筑紫路に別れむとする船出にも領巾振るひとのなくて寂しき

みづからを棄てられびどのごと思ひ筑紫の國に別るるもわれ

つれなくも船出を知らず鐘ひびく甲板にしてみものを思ひぬ

いにしへの太宰の師の船より帥もわが乗る船はあはれなるかな

筑紫路の旅のをはりの消息もまだ書かぬ間に船出づと云ふ

筑紫路の旅長ければうつそ身も山に瘦せけむ海に瘦せけむ

もの思へばくれなる丸の甲板も夜の露臺かと思はれしかな

旅なればともに語らふ君もなしひとり寂しく海と語らむ

島ふたつ戀びどの心と並びぬ君に似し島われに似し島

大阿蘇もいつしか雲にへだてらる筑紫の雲は濃くてうらめし

水のいろうつくしけれど鎌倉の海に似ざればはかなかりけり

はかなげに戀がたりするわが友のかたはらに啼く海の鳥かな

船にして輪投げのあそびするるときも戀を忘れずためいきをつく

雲を見てうらははかなげにかこつらくかのひとと見し雲に似るかな

かかる夜にいづれかふさふいづれよき海のはなしと戀のはなしと

わが胸に愁を送る海のかせ君が方より吹くとおもひぬ

君がこと船のうへより祈りつつ金毘羅かせにひとり吹かるる

そのむかし薩摩へくだる初旅の船のさまなどふと思ひ出づ

あつき頬を風に吹かすどつと出でし夜の甲板に置ける露かな

浪のごといと高らかに笑へるも海に住む子のならひなるべし

或る朝のながきわかれの寢覺めより寂しきものか船の寢覺めは

月はそく空のあなたにかかりぬ靴音さむき船の朝戸出

あかつきの空にさびしくまたたける君が瞳に似たる星かな

夜の露に濡れし帆綱に手を置きてふとしも思ふ君が濡髪

瀬戸の海島の畑の菜の花もさびしければか船にわが居り

甲板の籐椅子に凭りて思ふこと君戀しやと云ふほかになく

船上哀歌

この愁ひいつかはかなく消ゆるごと船の煙も浪に消ゆるや

友とわれ

夏は來ぬ懶青楓と筑紫にて逢ひし日遠くなるがまにまに

神よりも弱き心を持つと云ふ友にこのごろ戀ありやなし

涼しさは主人あまじのかたるはなしより湧くと云ふなり我鬼窟あまじの夏

白秋が佛とならで今日もなほ人におはせるありがたさかな

友さわれ

わが吉きらじ一いたくな酔よひを躓つかば魂たまを落おさむな酔よひを吉きらじ二

牧羊ぼくせん神かみの會あひのころのことなど思おもはれて維う納なの友とも戀こしきも夏

淺草あさくさのものがたりよなさめざめと泣なきてはこばぬ友ともの筆ふでよな

潮風うしほの作者そごはをかし酒さけのなき國くににしばらく往ゆかばやと云いふ

大理たいり石いしに紫水むらさきみづが彫うりし女身にょしんにもややまつはれる戀こがたりかな

世よにも倦うき戀こにも倦うきぬただひとり市いちに隠かくれて友ともを思おもはむ

あなあはれ世よを憤いるすべをのみ知りて戀こするすべ知らぬひと

塵ちりの世よの塵ちりのなかなる塵ちりの身みが世よを憤いることのをかしさ

友さわれ

杯を舗に投ぐれば碎けたり胸の怒りのやりどころなく

世を救ふひとはなきやと思ふときわれも雄ごころおさへかねつも

そのむかし戀の猛者なご呼ばれたる身も末法の世のさまに泣く

みづからを嘲ることもうつし世を歎きわびたるはてど知らずや

いつはりの世を憤り飲む酒もいつかつめたくなりにけるかな

友さわれ

懺
悔
行

一 寂 寥

北國の旅にてうたへる歌

旅ごこち戀覺めごこちいづれともあれさすらふは寂しきものを

君を得ずただ寂しさを得しと云ふ人あり旅に出づと云ひける

はなやぎし後のわが世は旅にゆき少し寂しきことも習はむ

寂しさを覚^ぶむるころは山に往き去年の寝雪を見るころかな

旅に死ぬわが身のはてを思ひつつ野ざらし紀行讀めば悲しき

北國の旅に雪見ず寂しがるおのが心をいとほしみゆく

ひとしきり身に染みわたる寂しさはやがて芭蕉の句のころかな

涙落つはなやかなりし昨日より寂しき今日をよしと云へども

しんしんと懺悔のころ起るとき旅に死なむとふと思ふとき

寂しさの極まるところ海ありて死ぬやとばかりわれを誘へる

いやさらに懺悔のころ切なれや切なれやとて涙ながすも

或るときは戀人すがたあるときは漏路すがたのわれを見るかな

或るときはふと人間のたましひの寂しさに觸れおののきにけり

寂しさにさへ見棄てられなほ旅にあり現身の死にがたきかな

あなをかし旅にて得たる寂しさも遊びのはての寂しさに似る

二 靈山行

高野山に登る道すがらうたへる歌

夕されば狩場明神あらはれむ山深うして犬のこゑする

あらし來ぬわれに不淨の咎ありや山に問へども山のこたへぬ

あらし來ぬ戀には死なで山に死ぬ身かとおのれを哀れがる時

△いかづちに撃たれて死なむことをさへ願ひぬわが世あまり寂しき

いかづちを友とする日も来よかしくと憤ろしく云へど寂しき

戀も消え煩惱も消え悔も消えすがすがしくもいかづちを聴く

幻の世にまぼろしの戀をしてはかなき悔をするが悲しさ

南山の雲より遠く北山の雨よりさむき君とこそ思へ

秋江が去年こぞの高野の消息に書ける霧よな書ける雲よな

三 僧房夢

高野山のある僧院にてうたへる歌

戀を棄て世を棄てひとり來しひとの僧房夢より悲しきはなし

僧房はものみな寂しありがたき涅槃のさまを描きし襖も

これを見て懺悔の歌をつくらむと机のうへに先づ獨鈷を置く

すべてみな夢とも知らず頼み來し夢見る人のあはれなるかな

うつし身の罪業つきす夜ごとに過現未かけし夢を見るかな

いつの間に夢まぼろしのなかに住む身とはなりけむ果敢なやと泣く

夢のなか泣きて訴ふる聲も聴くもの狂ほしきためいきも聴く

まざまざと餓鬼畜生の姿さへ見えてかなしき夢なりしかな

金堂の縁にねむりて見し夢はうつくしかりき人に語らじ

夢さめぬ涙に濡れし枕など君と寐る夜のあかつきに似る

いづれをばはかなしとせむ別れ際戀のさめ際夢のさめぎは

夜は深し覺めたる夢のあとを追ふこころもいつか行方知らずも

夜ごとに夢も寂しくなりまさり心も瘦するこころこそすれ

四 過ぎし日の夢

或る日山上にてのはかなき思ひ出のうた

おもひでにあるは誰が子の似顔繪ぞこれも忘れぬひとに數へむ

土藏くのかげ人にかくれて泣くために往きしところと今も忘れず

讀みふける草双紙にも涙落つ少年の日の春のかなしみ

もの思ふことなどはやも知り初めぬ夕空見ても涙ぐむころ

人の世の秘密を知らむねがひより人戀しなご思ひ初めにし

罪人つみびとと呼ばれむことのうれしさもうさうさ知りてももの思ふ頃

しみじみと涙を流すことをさへはやくも知りし我なりしかな

うたがひは世に滿つ苦し惱ましと少年も死を思ふころかな

戀を知る頃ともなれば吹く風にちる薔薇さへ悲しきものを

かへりみてみな偽りの戀と知るこの寂しさを何にたとへむ

うつくしき子も偽りを云ふことを知りぬわが世の戀ははかなし

○いつはりの戀とも知らずうつつなく戀に酔ひたるあはれなる子よ

かりそめの偽り言いつはりにがいつはりの戀を生みきと思ひあたるや

五 死を思ふ

或る夜半にひさり寂しくうたひたる歌

死を思ふ死しての後の世を思ふこの寂しさに命けづるも

死の床は冷たかるらむ戀覺めの後のわれらの小夜床こよとこに似て

わが墓のまへに来て泣くひともなき寂しき死後のさまも思ひぬ

あるときは墓のやうなる冷たさを覺ゆと君に云ひしを思ふ

夜となればしみじみとして死を思ふなほ戀人を思ふごとくに

六 佛法僧

おなじく或る夜寂しくうたへる歌

ただひとり鬼界が島に棄てられしごとくにさびし夜半の寢覺めは

悲しげに佛法僧の鳴く聲を或る夜は君の聲かと思ふ

われのごと鳥もこの世を果敢なむや佛法僧のかなしげに鳴く

空見れば瞳のごとき星ひとつあり忘れぬ夜半に似るかな

夜は深し佛法僧のこゑ遠くしんしんとして寂しさのわく

鳥類てうちうの佛法僧の鳴き聲もかゝる夜聴けばありがたきかも

おのが身の悪因悪果しみじみと思ひあたりて涙ながすも

ただひとり思ふは遠き寂光土われの心のふるさとのこと

萬卷の經にまされる懺悔歌つくらむ夜ごと涙ながして

懺悔歌幾首つくらば許さるる罪かと問はむ佛法僧に

秋風に問はむこの世にわれのごと悔み歎くものありやあらずや

天竺の婆羅門よりもあはれなる身ぞと思ひぬ懺悔するとき

好^{すき}ありきするも懺悔の旅するもいづれは似たるこころちするかな

七 遁世

世を厭ふ子のうたへる歌

世を遁るさまよひ往きしそのはては鉢叩ともならばなるべく

いつはりの世を厭へばかこのころは太祇の句にもしたしみにけり

まぼろしの世とも思はず人を戀ひ昨日は何を歎きたりけむ

木兎うくさき莊さきに秋風吹けば詩聖しむじやうの白秋佛はくしゆも寂しからまし

われかかる偽りの世に生きむやといきどほろしく涙ながしぬ

秋風はたまたま遠き人の世のうき消息をつたへ來るかな

或
る
女

酔ごこち夢見ごこちの樂しさは君ならずして誰か知るべき

戀に酔ふ否々君がこゑに酔ふいな君が接吻くちづきに酔ふ

われ知らず戀の深みに落ちてゆくこの酔ごこち忘れかねつも

うつくしきひとに對へばつれづれの目のたたかひもおもしろきかな

或る女

うつくしき敵を持つ身となりにけり目のたたかひを挑まれし後

目のいくさ終りてさびし暖爐の火燃ゆる音のみしめやかにして

弄火ひろそびに似たる戀かなあやまたば二人その火に焼けて死ぬらむ

おそろしきこの弄火よ人妻と思ひ合ふほどかなしきはなし

あな寂し弄ぶべき火もがなど謎のごとくにたはれめは云ふ

閉ざされし扉をたたく身のあぢきなさ知るやと謎のごとく問ふひと

君の云ふ謎解きがたし解くまでは君と手取らじ君と語らじ

耳元にささやかれたる謎ひとつありてその夜を忘れかねつも

石となし火となしわれを弄ぶ魔法つかひの君なりしかな

かの君にもてあそばれてあるときのややはかなかる楽しさもよし

こころをば手毬のごとく思へるや夜毎心をもてあそぶひと

戀知らず情知らずのかのひとは卑し首陀羅の娘なるべし

戀知らず情知らずの女には枯れし薊の花をあたへむ

この思ひあまりにつらしこの思ひかの憎らしきひとに移さむ

やや似ると君をおもひぬ西鶴の好色庵の女あるじに

教へよと強ひたまへども君の間ふ不思議は君の胸に住むらむ

水いろの衣着て君は來たまひぬ海よりや來し空よりや來し

水いろの衣はふさはすこの次ぎはほのほの色に染めて來たまへ

かにかくに君がこのみのはかなかり今日も一めたる水色の帯

二人あて語りある間にいつとなく昔の戀のよみがへり來し

君に問ふ如月ごろの比叡おろしよりも寒きは誰のこころぞ

消
息
抄

レ消息をひそかに破る君が手も見えてはかなし秋のゆふべは

昨日今日人を頼まずなりてよりわが世はかなと云ふ文も来る

防人の歌にもましてはかなしや君がおこせし筑紫消息

レながながとよしなきことを文に書く片瀬妻こそをかしかりけれ

漁り火も見えてさびしとまづ書きし或る夜のわれの片瀬消息

レ夜となれば棄てしは誰と云ふごとく古消息のさめざめと泣く

日蓮の袈裟書たふとしかのひとの鎌倉ぶみのたふとときがごと

をりをりは浮世の寒さもたらしめて風のごとくにきたる文かな

雪降ると云ふ消息もはるばると佐渡より来れば涙こぼれぬ

レ文書けばかなしきことを書く癖もむかしの戀の名残りなるらむ

レ読みしのち火に投げ入れよかく書きて戀人めきし消息もする

あはれなる友の文かなまた戀に破れて旅にさすらふと云ふ

✓ 墨うすし書きたることもあぢきなし汝が文はみな書置に似る

✓ 鎌倉の海のやうなる紺青の紙に書きたる君の消息

夜の心

○ 忽然とわれ星となる不思議なごあれかしこの夜あまり寂しき

○ ^V 死なむなごどもに誓ひし夜のさまに寂しさのみが似たる夜かな

○ ^ソ 夜はくだつしんしんとして迫り來るこの寂しさが命けづるや

わが胸のうちにも浪の音聽こゆ暗くさびしき海やあるらむ

耳を寄せかろく目を閉ち今日もまた御胸の海の遠鳴を聴く

わが胸の暗き海邊に今日も来て忍び泣するひとは誰が子ぞ

火とならむことも願ひぬ或る夜半はあまり寂しと思ふものから

われを見ずただ燃えあがる火を見よと或る夜半君に書きし文かな

火の消えていつしか灰となる時の寂しさも知るはかなさも知る

夜は更けぬ風の音さへ聴こえねばひとり寂しく口笛を吹く

わが耳のかたはらに來て夜は云ふ何ゆる夜ごと涙ながすや

夜もすがら思ひみだれてさまよひしかの山莊の薔薇畑かな

夜の戸を微かに鳴らす風ありき寂しさや鳴るはかなさや鳴る

戸に觸るゝ風もなつかしかのひとの衣摺に似る音を立つれば

夜は深し漂ふごときこゝちしてひとり果敢なくもの思ひ居り

夜は更けぬともに居れども眠られぬ君なるかなやわれなるかなや

思ふことはてはいつしか戀に落つ寂しき夜のひとり寢の床

夜となれば心亂れて堪へがたしうきひとのごと夜を憎まむ

夜をひとりあるに堪へねばわれ書きぬ遣らじと云ひし鎌倉文を

みづからの墓をつくるに似る思夜ごとにするとかたる子もなし

夜となればもの、哀れを知るひとがするゆるわれもの思する

二つ三つ戀失ひしおもひでがこの夜もて來し寂しさにして

幾人のひとを戀ひたるいやはてのこの寂しさとみづからも知る

訴ふるひともしなければ是非もなし夜の空遠き星に訴へむ

空遠きいなづまにさへ涙落ち心弱くもなれるものかな

うるみたる君が瞳に似たるゆる星戀しなご夜はおもへる

旅
ゆ
く
心

ひと巻の九華仙館詩草ゆる世を厭ふ身と知るや知らずや

うち日さす都にあれどなぐさまずひとり流離の旅をおもへる

あるときは心も猛におもへらく弄ぶべき日輪もがな

あるときは芭蕉の句にもしみじみと涙ながしぬ命さびしと

旅ゆく心

あるときはいさごほろしく罵りぬ云はで止むべき身かはわれかは

うつせみの命はさびし戀ごろもはやふさはねば旅ごろも着む

はて知らぬ旅路のはてに死ぬおもひふと胸に來とはかなげに云ふ

芝香忌はいつしか過ぎぬありし日のありしをしのび旅に出づべき

しみじみと旅のこゝろを語りつゝ戀するごとく涙ながしぬ

うつし世のうつし身かなし破れたる戀人ならぬ旅に遁れむ

世を棄てゝ歌行脚なごするもよしいにしへ人もしたるごとくに

ゆる知らず涙ながるゝ旅ごゝちこの寂しさは片戀に似る

いかづちに似しもの胸に住むごとし旅に往く身が何の噴りぞ

旅に出づ檣の柱に残すべき文もあらねば寂しやと云ひ

旅に往くこの寂しさはそのかみの戀につづける寂しさにして

悪夢にも心あまりにおごろかず憂き旅寝にも馴れにけるかな

夜となれば胸あさましく狂ひ出づ旅に出づればものに狂ふや

馬
樂
忌

いたづらに酔うてある間に馬樂忌はまためぐり來ぬ寂しきかなや

左平次のものがたりなど聽きし夜もやうやく遠く馬樂忌は來ぬ

彌太郎ちかしと云ひて酒汲めば杯を見ても寂しさの湧く

酒さむし馬樂が呉れし杯は淺草の夜に見し月に似る

朝日子は馬樂地藏にあらねどもめづらしければ酒たてまつる

雪降りば馬樂地藏も寒からむ朝まづ思ひたるはこのこと

雪降りぬまづさかづきに満たせるは馬樂地藏にたてまつる酒

霜しろく馬樂地藏のうへに置くころともなりぬ酒に走らむ

世を厭ふころは深し馬樂の忌やうやく近くなるがまにまに

三日月を見ても馬樂を思ふほど世を拗ね人となりしわれかな

長崎紀行

婆羅葦増は遠しはるばる旅に出で君が心はさらに遠しも

長崎に往けど戀しきひと見ず寂しかりけり筑紫巡禮

世を厭ふ流離の旅のはてごころ長崎は身のはてごころかな

長崎に来て戀に死ぬことなどを思ふもわが世厭へるがため

✓ 陸奥に往きし芭蕉のかなしみと長崎にゆくわれの愁ひと

✓ 旅ごちうらはかなげに書く文を長崎ぶみと名づけけるかな

ながながと長崎ぶみの長うして日はたそがれとならむとすらむ

長崎の春のをはりの惱ましさわれもおぼゆる砂日和かな

龍鍾しほしほとなりし茂吉と酒飲めばわれもしほしほとなりけるかも

長崎に来てはや三年経ぬと云ふ狂人守の茂吉かなしも

長崎の茂吉はうれし會へばまづ腎の薬ををしへけるかも

病みあがりなれど茂吉は酒飲みてしばしば舌を吐きにけるかも

媽港^{あまがは}へ追はるゝ人のかなしみをこよひおぼゆるわれならなくに

赤寺の沙門即非の額にさす夕日はかなし支那人^{あぢや}ひとりゆく

もの思へば魚板の音もうらがなし海西法窟の春のゆふぐれ

唐寺の鐘の音にもうなだれてさすらひびとは涙ながしぬ

關帝のおはす御堂に夕日さしこのゆふぐれのしづかなるかも

媽姐^{あまざ}棚の船魂よりもありがたしまことありてふ君が心は

長崎の名勝圖繪のなかをゆく旅びとなれば繪のごとくゆく

長崎に來れば忘れむかなしみか丸山ゆけば消えむうれひか

し
丸山の遊女がすなる夕繪踏白き足よりたそがれにけり

し
清方の「繪踏」の繪よりぬけ出でて來し女あり寢よと云ひける

長崎の丸山の夜の遠つひじをば四つ竹鳴らしゆくは誰が子ぞ

ぎやまんの大酒杯を手に取れば寛濶くわんくわつごころおさへかねつも

し
丸山の茶屋のあるじの段六だんろくが戀に瘦すると云ふはまことか

忘るなど口疾に云ひて丸山のたはれめが挿さす玳瑁の櫛

かりそめにかき抱けごもしみじみどかなしきかなや夜の女は

寂しさの極まるところしら玉の女身のほかに欲るものもなき

寂しさに堪へずふと死を思ふとき伽羅焚くちまた目にうかぶとき

拳銃びすごるの音など欲りつつ走る夜のもの狂ほしき旅ごこちかな

茴香の酒をすすむる女ありて長崎の夜は更けやすきかな

まづ酔ひぬ汝が接吻はいにしへの珍葩の酒のかをりにも似る

長崎に来てもかなしみ消しがたく酒に走りしわれなりしかな

命死ね身もほろびよと今日も飲む蓬の酒はすてばちの酒

旅にしていづれ悲しきいづれ憂き酔のさめぎは戀のさめぎは

海ちかき酒場にをぐる露西亞少女頬の黒子ほくろのかなしかるかも

うらさびしビエル・ロテイがお菊にも似たるひと~~な~~し長崎の夏

たまきはる命かなしく長崎にさすらひ來ぬと云ひて夜も寝ず

✓
旅人よ夜も寝ず何をなげくやと長崎びとに問はれけるかな

いざさらば戀を賭けむと云ふは誰長崎びとの博の打ちやう

紅毛の饗宴の圖のなかに見し遊女のはかな顔を忘れず

長崎の夜がたりすればおもしろし猶太少女が戀のはなしも

その君の情知らずを長崎の鳥にたとへてい往きけるかも

✓
長崎の阿茶人形のごとき戀小さくはかなくあはれなる戀

これやこのじやがたら文にあらねども今日も悲しき消息を書く

じやがたらのお春の文のはかなさに似し文來ぬとはかながるひと

汝が句をひとかたならずもてはやす女を見きと我鬼に書く文

天竺の消息よりもはかなしや旅にして見る君が消息

はしけやし指鬘外道の作者にもこよひはながき消息をせむ

みな人のおらしいよを申すなかにありてわれのみひとり君が名を呼ぶ

しみじみと懺悔卓のまへに伏し涙する目のわれをこそおもへ

✕
基督は十字架を負ふわれはまたのろひなげきのかずかずを負ふ

にんげんの命ほろぼす地獄繪を十字架くわすの堂に見るが悲しさ

かの君の南蠻ごのみ天鷲絨の黒ごいちめん縫の蘇枋と

凧揚げの益者と聽こえて逞ましやわが長崎の君の兄者人

涙落つ君がわかれの言葉にも五島がよひの船の笛にも

筑紫なる五島の海の勇魚とりともならば消むこの愁ひかな

勇魚とりいさなは取らず酒にゆくわれは歌はずただ旅をゆく

旅びどの愁癒えねばえうもなし蘭醫が書きし處方秘箋も

▽横さまにまごろす煙管啣ふれば海の愁のきたるをかしさ

松の葉の琉球組の唄よりもすこし悲しき船唄も聴く

長崎の海を飛ぶ鳥鎌倉の海飛ぶ鳥に似ねどなつかし

支那街の夜を君に聴くあはれなる杏花の家の戀がたりかな

寂しきは支那人街のたそがれにふとしも見たる金絲雀の籠

夢なりやあらずやある夜支那少女来て紅樓にわれをさそへる

肉桂のかをりしづかにただよへる南京街の春のゆふぐれ

眇目の支那人ひとりゐてまづわれに金を出しねと云ひにけらすや

おそろしき鴉片の家の門を守るぬば玉の夜の黒き猫かな

海越えて往なむ日本も住み憂しとなげく子を見ぬ長崎にして

世をのろひ神も頼まぬわが身ぞと朝繪踏すも夕繪踏すも

繪踏板は宗門藏にわが文は棄てられもせで君が文箱に

夜に入りて精靈船をながすときともに流せし文にやはあらぬ

われはまた戀の世界の邪宗門のろひねたみに時を送れる

崑崙の風海越えて吹くところ世をいきどほる歌もつくらむ

寂しさは去來の發句の薄塚花すすきてふ字より來るらし

十年まへ平野萬里と來しときの長崎の夏も忘れなくに

なつかしやそのころ讀みし長崎のことを書きたる荷風が文も

天草の旅のおもひで無花果の葉蔭に見たる瞳忘れず

白秋とともに泊りし天草の大江の宿は伴天連の宿

露西亞文字遊びの家としるしたる招牌も見ゆ稻佐おもへば

そのむかし稻佐にわたる舟にして見し夕雲に似たる雲かな

あかねさす白日長崎の街をゆき何に愁ふる旅のこころぞ

三菱の倶楽部の庭の芝の上に降るとき青し長崎の雨

長崎の夏江が家の蟲はらひ藍映の繪も干されつらむか

南無まりや観世音こそたふとけれわれらが戀も護りたまへば

松の葉の唄もはかなし長崎の鳥はつれなき鳥どうたへば

そのむかし君と別れし夜のさまに鷗啼くなり長崎の海

長崎の海の鷗にもの間はむ君に似しひと見るや見ざるや

この夏は白龍船べつりゅうせんを見に来よと涼しき文字の文も來しかな

奉納の蛇踊りいかに長崎の祭いかにとおもはるるころ

お九日くじちの祭見よりもうつくしき長崎少女見むとゆくかな

長崎に往けども寂しかにかくにゆくへも知れぬ旅とおもへや

ゆく春の温泉うんぜんおろし今日もまたうらはかなげに旅人に吹く

長崎の春は來るらしめづらしき阿蘭陀皿の花模様より

▼
かりそめの長崎びとの情さへ身に染むものか旅に出づれば

▼
世を厭へばいにしへびとも旅ゆきぬわれも世を憂く長崎にゆく

旅人は命かなしくなりぬらむ死後昇天を祈りつつゆく

修善寺遊草

✓
修善寺のわが消息に封じやる野菊の花もあはれなるかな

✓
夜の二時に君が涙を洗ひたる湯槽と聽けばすすまじきかな

✓
いづれよき天城おろしがもて来る山の寒さと君の寒さと

冬ちかし天城の山の狩倉を吹き來し風にわれも吹かるる

修善寺のうら山に住む蜂飼ひも秋をなげくと云ふはまことか

夜もすがらかなの君のごとすすり泣く桂の川の水の音かな

もの思ひしばしつづけてゐるうちに死を思ひぬ湯にか入らまし

安らかにいづこに往かば寝るを得むここにも残る秋のおもひで

はかなげに修善寺よりと書きし文古消息に見出でしもわれ

白秋とともに酔ひたる昨日さへ遠きこころに伊豆の夜は寝る

大観が蓬の髪を吹きみだす虎溪の橋の秋のかせかな

弘法のむかしよりなほふつふつと湧きて獨鈷の湯ありがたきかも

修善寺の秋のたよりのあはれさは消息を書くひとのみぞ知る

そのかみの汝が情より熱き湯にひたりてものを思ふわれかな

戀を棄て天城の山の狩倉にい往きし友も思はるる秋

加茂川の河かせよりもやや荒くつれなかりけり天城おろしは

鎌倉の海邊に立ちてながめたるおもひでゆるに伊豆はなつかし

修善寺の鐘の音にも京の夜を思ふと云ふやあはれたはれを

或るときは吾子戀しなご思ひつつ修善寺紙の消息も書く

湯の宿にありて聴くときおもしろし隣の部屋のわかれ話も

修善寺の夜の暗さは鎌倉の夜の暗さに似ねば寂しき

湯にひたり海にひたるとうたがひぬその黒髪は海松房に似る

遠空の山火はかなしかにかくに果敢なきものの戀に似たれば

山鶯啼けばかなしきまぼろしにかの湖上見ゆかの少女見ゆ

浴泉記書くや書かずや知らねどもかのたをやめが取りし筆かな

山焼の灰もはかなしうらわかきさすらひびどのうへに落つれば

いづこにか骨牌の札を切る音す温泉の宿の秋のゆふぐれ

浴泉記レルモントフが書きしよりさらに悲しきものがたりかな

うつくしき鷺堂まがひの文字をもて君が書きたる浴泉記はも

寒檠莊雜詠

寒き灯の洩るる窓をばたづね來よなど書きやりぬ戀ならなくに

狂ほしきことのみ思ひつづければ或る夜はをかし灯とももの云ふ

わが家を夜ごとに洩るる窓あかり雪あかりにも似ればなつかし

如月の秩父嵐の音を聴き比叡おろしかどうたがふもわれ

夜の灯のまへに項垂れただ思ふこの寂しさをいかにすべきと

われはわれ君は君とても思ふ寂しき夜のつづくころかな

そのかみの古消息を讀むによし涙のごとき夜の灯のいろ

門を閉づ心の門も君に閉づ敲きたまふな歎きたまふな

✓

氷るやと思はるるほど寒うしてこのともしびは京の灯に似る

洛陽の酒徒と呼ばれし日も遠く寂木莊にひとり寝るかな

空遠く秩父の山の雪見えてわが思ふこと少し寂しき

落魄の歌をつくりしころ戀しさすらひ心止みがたくして